雨の中、花壇の前に立っていると、声をかけられた。

「ルナちゃん」

そんなふうに呼ぶのは、家族だけのはずだった。
驚いて振り向くと、ユニフォーム姿の彼が、こちらを見ていた。
彼女は、返事をしなかった。
彼は最初、同じように黙っていたが、やがて参ったといったように、息を吐いた。

「これって、なにか新しい尋問？」

それでも彼女は、なにも言わなかった。

「あのさ、聞こえてるなら、返事くらいしてくれると嬉しいんだけど」
「・・・・聞こえてます」
「もしかして、ご機嫌、ななめ？」
「・・・・その呼び方が」

彼女は、いらだちを隠さなかった。

「やめてもらいたいです」
「呼び方？」

予想外の言葉だったのか、彼は呆気にとられる。

「どうして。可愛いのに」

さらっとそういう彼の精神が、理解できなかった。

「それは家族の呼び方です。知らない人に、呼ばれたくないです」
「わかった」

彼は、その茶色の瞳をふぅっと細めると、じっと彼女を見つめた。

「それじゃ、なんて呼べばいいの」
「ふつうに。宮ノ森でいいです」
「なんで敬語なの」
「初対面の人に」
「オレは一樹。それにもうこれで4回目デショ。初対面じゃない」

どこかムッとした表情になった彼を、彼女は不思議そうにながめる。
なにか自分は失礼なことをいったのだろうか。

「3回目です」
「4回目だよ」

強い口調だった。彼女は、少し後ろめたいような気持ちになった。
たしかに、正確に言えば、4回目かもしれない。
けれども、まさか気づかれていたなんて、思わなかった。
その反応に、彼もまた、彼女が気づいたことに、気がついたようだった。

「ね？」

どこか、嬉しそうな表情。
ずいぶんクルクルと変わるものだ。
彼女はおかしくなった。

「あれ」

そんな変化を、彼もまた、見逃さない。

「機嫌、治った？」
「あなたって」

彼女はクスクス笑い出した。

「小動物みたい」

今度は、複雑そうな顔をする彼を見て、余計に笑いが収まらない。

「ちょっと、笑いすぎ」
「ごめ・・・。ごめんなさい」

ツボに入ってしまったようだった。なかなか収めることができない。

「だって、」

なんとか言い訳しようとするそばから、笑いがこみ上げてきて、言葉にならなかった。
彼は呆れたようにそんな彼女を見ていたが、あまりに彼女が楽しそうに笑うものなので、いつのまにか、つられてしまったようだった。
気づくと、一緒に、笑っていた。

「変なの。あなたって」

普段は端正に整った顔も、こんなふうに笑うと、やんちゃな子供のようにみえる。
あどけなくて、無邪気な表情。
彼女はそんなふうに感じる自分が、不思議だった。

「やっぱり、ルナちゃんって呼びたいな」

いつの間にか笑うのをやめた彼は、どこかまぶしそうに、彼女を見ていた。

「あなたのこと、名前で呼びたいんだ。家族じゃないと、駄目なの？」
「――月子」
「え？」
「だから、名前」
「ルナじゃなくて？」
「そんなの、日本人じゃないよ」

彼女は少し苦笑いした。

「月子だから、ルナって、家族が呼んでいるだけ。といっても、妹だけだけど」

「そうなんだ」

「だから、別に名前でもいい。あまり呼ばれ慣れていないけれど」

彼は少し考えるようなそぶりをみせたが、やがて視線を彼女に戻すと、きっぱりと言った。

「オレも、ルナって呼んでいい？」

「だから、名前は」

「わかってる。月子ちゃんだろ。けど、妹さんの気持ち、わかるよ。あなたにぴったりの名前だと思う。ルナって」

「・・・・・日本人っぽくない。名前負けしてるし。学校で呼ばれるのは、恥ずかしい」

「じゃあ、ふたりだけのときなら、いいね」

思ってもみない結論を導かれ、彼女は焦った。

「そうは言ってない」

「誰も聞いてないところでなら、いいってことでしょ」

「あなた、ちょっと強引すぎるよ」

「自覚してる。けど」

彼はいたずらっぽく笑った。

「そうしないと、あなたはきっと、捕まえられない気がするから」

彼女はびっくりした。

「どういう意味？」

「ん。まあ、それはおいおい」

「気になるのだけれど」

「ほんっと、あなたの言葉は、率直だねえ」

「それは、よく言われるけれど」

「危なっかしいというか、なんというか」

「それも、よく言われるけれど」

「その素直さは、ほとんど凶器に思えるよ」

「それは、言われたことないわ」

いちいち、返事をする彼女に、彼はなんともいえない眼差しを向ける。
いったい、どうすればこんな子が育つのだとでもいいたげな。
あるいは、あまりに無防備すぎる姿に、独占欲を、駆り立てられるかのような。

「あなたは、もうすこし」

だから、思わず余計なことを言いそうになって、
けれども、あまりの身勝手さに、最後まで言葉にできなかったようだった。

「なんでもない……」

彼女は、眉をひそめた。自己嫌悪にも似た影を、彼の瞳に感じ取って。

「わたし、また失言してしまったのかしら」

いままで幾度となく、繰り返してきた。
言葉をうまく使えなくて、人を傷つけることばかり、繰り返した。
反省しても、しても、また同じことをするのは、結局、何が問題なのかを、自分は理解できていないせいなのだろうと、彼女は思っていた。

「失言したのは、オレの方だよ」

苦笑のなかに隠しきれない、自嘲の揺らぎがみえる。

「あなたといると、ペースが崩れちまうみたいだな」
「ペースって、何？」

彼は一瞬、言葉を失った。
次いで浮かんだほほえみは、それまでとは違う、距離を感じるものだった。

「そろそろ練習に戻らないと。続きは、また今度にしよう。ルナちゃん」

結局彼が、何のために自分に声をかけたのか、何か用事があったのではないのか、そんなこと

さえわからないまま、彼女は彼の背中を見送った。

出会ってから、もう何度も、背中ばかりを見ている気がする。

近づきたいのか、遠ざかりたいのか、わからない。

そんな彼女のジレンマを、彼もまた、抱えているのかもしれなかった。